



Title	ワーズワスにおける「眠り」について
Author(s)	齊藤, 隆文
Citation	大阪外大英米研究. 1987, 15, p. 195-206
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99108
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ワーズワスにおける「眠り」について

齊 藤 隆 文

ロマン派詩人たちの特徴の一つに眠りに対する関心がある。たとえばキーツではそれは夜のとぼりの中に溶けいってしまうような、意識と無意識とを判然と分かち難い自己滅却的な眠りであった。「ナイチンゲールによせるオード」でキーツはこう歌っている。

Was it a vision, or a waking dream?

Fred is that music:—Do I wake or sleep?

“Ode to Nightingale”, 11. 79-80.

一方シェリーのにおいては眠りは夜の後にやってくる歓迎すべからざる無感覚な死の愛し子であり、シェリーの願いはそれから逃れ目覚めることであった。それゆえ詩人の使命も又人類を眠りから目覚めさせ新しい思想の息吹に触れさせることであったと言える。「西風に寄せる歌」のなかでそのことをシェリーは次のように歌っている。

Be through my lips to unawakened earth

The trumpet of a prophesy!

“Ode to the West Wind”, 11. 68-69.

ところがワーズワスにおける「眠り」は両者とはかなり趣を異にしているのである。なぜならば両者が眠りを肉体と精神の総合的な眠りにとらえ、それを特別に分離して考えていないのに反し、ワーズワスはその二つの眠りを明確に区別しているからである。それが最も象徴的に表されているのは1798年に作詩された「ティンタン寺より数マイル上流にて詠める詩」であろう。ここでワーズワスは都会の喧騒のなかに独りいるときにワイ河の風景が心によみがえった体験を次のように歌っている。

Until, the breath of this corporeal frame
And even the motion of our human blood
Almost suspended, *we are laid asleep*
In body, and become a living soul;
While with an eye made quiet by the power
Of harmony, and the deep power of joy,
We see into the life of things.

(“Tintern Abbey”, ll. 43-48; イタリックは筆者)

肉体が眠ることによって魂が生きたとは、肉体の五感の創造的な「眠り」の中で魂と想像力が活発に働く⁽¹⁾ことをさしている。この想像力によってワーズワスは「万物の生命を洞察するのである。」それは言い替えれば「落日の光の中とまると太陽と生ける大気と青空と人間の心」(ll. 97—99)などあらゆるものの中に浸透している生命を実感できることでもあった。そしてこのことは見る主体である人間の心と見られる客体である自然の中に共通する生命を看取することであり、その意味でワーズワスは大自然との合一を果たすのである。

ところでこの詩は少年時代のような自然に対する動物的な喜びが去った後に書かれたものであり、そこでは哲学的な思索を基盤にしてワーズワスの体験が意味づけられているといえよう。しかしながらこのような体験は決して「ティンタン寺」の詩に限ったことではないのである。むしろワーズワス自身認めている⁽²⁾ようにこうした大自然との精神的交歓は特に少年期にしばしば体験されたものであった。*The Prelude* の中においてもそのことはしばしば触れられていて、たとえば少年時代にひとり山頂に立った時の経験をワーズワスはつぎのように語っている。

Oft in those moments such a holy calm
Did overspread my soul, that *I forgot*
That I had bodily eyes, and what I saw
Appear'd like something in myself, a dream,
A prospect in my mind.

(*The Prelude*, Bk. II, ll. 367-371; イタリックは筆者)

ここでは肉体の眼がその本来の機能を忘れ、いわば眠ってしまい、その結果あたりの風景が心の中に浸透するのである。又さらに別の場所ではこうも言っている。

... for in all things

I saw one life, and felt that it was joy.

One song they sang, and it was audible,

Most audible then when the fleshly ear,

O'ercome by grosser prelude of that strain,

Forgot its functions, and *slept undisturb'd*.

(*The prelude*, Bk. II, ll. 429-434 ; イタリアックは筆者)

ここでも同様にワーズワスは肉体の耳の「眠り」を通じて、返って良く大自然の中にいきわたる“one life”の歌声を聴いている。このように見てくるとワーズワスが少年期の動物的な喜びを持って野やまを巡り歩いたそのこと自体よりも、むしろそれを契機としてしばしば体験した肉体感覚の「眠り」を通じて自然の生命への洞察を果たしたことに、大きな価値を見出していたのは明らかであるといえよう。

ここで注意すべきは、ワーズワスのこうした原体験においては魂の「めざめ」よりもむしろ肉体の「眠り」に積極的な意味合いが込められているように見えることだ。たとえば前者の例では肉体の眼を忘れてはじめて外的風景が心の内部の風景のように思えたのであるし、後者においては肉体の耳がその機能を停止して眠ってしまった時はじめて事物の歌がいつそう良く聞こえたのである。⁽³⁾ このことは「外的自然には色々の力があっておのずから人の心に印象を与えるのであるから、我々は賢明な受動の態度を持ってこそ我々の心を養いうるのだ。」⁽⁴⁾ というワーズワスの言葉と矛盾しないといえよう。なぜなら肉体感覚の「眠り」は自然の力をより良く受け入れる賢明な受動の態度と呼べるからである。このように肉体の「眠り」を通じて大自然が心の世界に浸透する態勢ができ、それによって大自然との合一が果たされるのである。

ところで興味深く思われることはこの肉体の「眠り」ないしは休止は、時に

肉体の死という寓意的な形をとるように思われることである。先程の「ティンタン寺」の引用のなかでも「肉体の呼吸も、血液の運行すらも止み」とひゆ的にしろ死を思わせるイメージが使われている。また例えばルーシー詩群の一つでは自然がルーシーを慈しみ育てる様子が次のように歌われている。

Three years she grew in sun and shower,
Then Nature said, "A lovelier flower
On earth was never sown;
This Child I to myself will take;
She shall be mine, and I will make
A Lady of my own.

.....
"The stars of midnight shall be dear
To her; and she shall lean her ear
In many a secret place
Where rivulets dance their wayward round,
And beauty born of murmuring sound
Shall pass into her face.

.....
Thus Nature spake—the work was done—
How soon my Lucy's race was run!

"Three Years She Grew", ll. 1-6, 25-30, 37-38.

この詩の特徴は自然の諸々の事物のもつ属性がルーシーにつぎつぎと転移していくことである。それはあたかもルーシーが自然物に同化してしまう程の迫力をもって全体を支配している。⁽⁵⁾ そしてその転移が完成した時すなわちルーシーの肉体が自然そのものとなってしまう時に自然の「仕事はおわった」のである。ここには本来死がもたらす感傷は少しも感じられない。むしろルーシーの死は、いわば自然との完全なる合一が果たされたがゆえに必然的にもたらされたものとして扱われている。逆に言えばこの場合の死は自然との完全なる合一の前提なのである。このように考えるとき、この詩は生々しい人間的な死を扱ったものというよりは、むしろ自然と人間との交流の寓意詩であり、この詩

において、肉体の「眠り」を通じて自然と合一するという先程のテーマが違った角度から再現されているといえよう。

また次のルーシー詩群の一つ「まどろみが私の心を閉ざした」でも同様のことが考えられる。

No motion has she now, no force;
She neither hears nor sees;
Rolled round in earth's diurnal course,
With rocks, and stones, and trees.
"A Slumber Did My Spirit Seal", ll. 5-8.

この詩は地球の自転とともに、ルーシーが見ることも聴くこともない永遠の眠りについている様子を歌ったものである。ところが同様のイメージが *The Prelude* においてワーズワスが幼いころスケートをする場面に使われているのである。ワーズワスが他の子供たちの騒ぎから一人離れて氷の上を突っ切っていった後、やにわに停止したときに次のような体験をしている。

...yet still the solitary Cliffs
Wheeled by me, even as if the earth had roll'd
With visible motion her diurnal round;
Behind me did they stretch in solemn train
Feebler and feebler, and I stood and watch'd
Till all was tranquil as a dreamless sleep.
(*The Prelude*, Bk. I, ll. 484-489; イタリアックは筆者)

このスケートの場面でも肉体の運動の停止の後、地球の自転という壮大なイメージが心のなかに浮かぶのである。ここではワーズワス自身のスケートの後のめまいとそれが治まっていった時のことを、外的自然の回転とその静まりに置きかえているのであり、ここでワーズワスは心の動きと外的自然の動きとを一体化して考えているといえよう。そして489行目という“all”とは当然ワーズワス自身も含まれており、ワーズワスが肉体の静止すなわち「眠り」を通じて自然と一体化している状態を暗示している。ここで注意すべきは双方の短い

引用の中に共通して“earth”,⁽⁶⁾ “motion”, “roll”, “diurnal”, という語が使用されていることである。とくに“diurnal”という語はワーズワスの全作品の中に三度しか使われていない⁽⁷⁾ ことなどを考慮すると、この両者の内的構造の類似は明らかといえよう。このような両者の類似を考えるとこのルーシー詩はやはり、スケートの場面に見られるような肉体の「眠り」を通じての大自然との合一という神秘的なテーマを寓意的に表現したものといえるだろう。結局ワーズワスがその作品の多くを通じて描こうとしたのはあくまでも自然と人間の交歓の大切さであった。ルーシーの詩の中で自然が語った次の言葉

She shall be mine, and I [nature] will make
A Lady of my own.

“Three Years She Grew”, ll. 5-6.

と、「早春の歌」でワーズワスがこの世の様を嘆いたときに使った次の言葉

Have I not reason to lament
What Man has made of Man?

“Written In Early Spring”, ll. 23-24.

は同じことの裏返し表現であり、人間の精神的な拠所を人間の知恵からではなく自然から学ぶべきだというのが一貫したワーズワスの主張であった。

ルーシー詩群については、これまで様々な解釈がなされてきている。ルーシーをワーズワスの妹やあるいは妻とみる立場や、その他の無名の少女とみる立場などである。⁽⁸⁾ しかしながらルーシーは誰であるのかといった疑問は以上のようなことを考慮した場合大きな意味を持たないようにおもわれる。Durrant はルーシーが誰であるかは重要ではないという立場にたってルーシー詩を死すべき人間の定めを歌ったものと解釈している。⁽⁹⁾ これは一方において正しい面をとらえている。だが単に人間の運命に対する嘆きと考える場合これらの詩を余りにも人間的側面から解釈しすぎるように思われるし、またルーシーを有機体全体の代表とするのも少し無理があるように思われる。そのうえルーシーの死に対するワーズワスの超俗的な態度、すなわちどこかにルーシーの死を肯定するような態度がある⁽¹⁰⁾ ことを考慮すると、やはりそこには上に述べたような

寓意的なものが含まれていると解釈すべきであると思われるのである。ルーシーの詩が複雑な読後感をわれわれに与えるのは、避けられぬ死を嘆く否定的要素と自然との合一という肯定的な要素が巧みにそこに織り込まれているからではないだろうか。またワーズワス自身子供時代にこの自然との一体感を最もよく経験したこと、そして成人するにつれ人生の重荷を担うとともにしだいに少年期の自然から遠ざかっていった自身の経緯からしても、幼い子供としてのルーシーを最も相応しい主人公としたことが納得される。

ところで注意すべきはこうした自然との合一の例は子供のみに限定されてはいないということである。例えばある特殊な状況においてはロンドンでさえも自然との合一を果たすのである。「ウエストミンスター橋上にて」と題された詩のなかでは大都会ロンドンがこう描かれている

Dear God! the very houses seem asleep;
And all that mighty heart is lying still!
“Composed upon Westminster Bridge”, ll. 13-14.

この詩では本来喧騒にみちた大都会が眠り、それ本来の機能を停止しているがゆえに、それが遙かなる平野や空の生命と調和し、新しい美を獲得しているのだ。また例えば「決意と独立」に登場する老人の場合を見てみたい。この詩では老人は次のように描かれている。

As a huge stone is sometimes seem to lie
Couched on the bald top of an eminence;
.....
Such seemed this Man, not all alive nor dead,
Nor all asleep—in his extreme old age:
.....
Motionless as a cloud the old Man stood,
That heareth not the loud winds when they call;
And moveth all together, if it move at all.
“Resolution and Independence”, ll. 57-58, 64-65, 75-77.

すなわち老人は最初大きな石のように、また雲のようにも見えたのである。そ

して老齡のため半ば死んでいるようでもあり、半ば眠っているようでもあった。ところでたとえどれほど老いてその姿が人間のように見えないとしても、人を岩や雲にたとえたり、半ば死んでいると言うのは、もし以上述べてきたようなことを考慮しなければかなり行き過ぎた表現と言わなければならない。しかしながら自然物そのもののように見える老人の姿が自然と人間の合一を寓意的に暗示しているととるときに初めて、そうした表現の正当性をわれわれは理解できるのである。またなぜワーズワスがこの老人に対して憐れみを感じるよりも、反対にある種の啓示をその老人から得たかも理解できよう。ワーズワスは決してこの老人のもつ知恵から啓示を得たのではない。なぜならここで蛭取りの老人はワーズワスに対して特に教訓のようなことは何も語っていない上に、その言葉は時に「判然としなかった」(11.180)し、再びワーズワスがその老人の生活ぶりを尋ねたときも老人はただ遥々と蛭を集めて旅をしているという事実を繰り返したに過ぎなかったからである。それゆえにこの詩では苛酷な生活に耐えながらも確信を持って自然を巡り、それに同化したような老人の姿にワーズワスは強い感動を覚えたのだと言えよう。

以上見てきたようにワーズワスは肉体の「眠り」を契機として自然との理想的合一を経験し、そこにその精神的支柱をおくとともに、作品においてそれをさまざまな寓意の形で表現したのである。そしてこうした自然との交流の原体験をワーズワスは「時点」と呼びその風景を次のように描いている。

There are in our existence spots of time,
Which with distinct pre-eminence retain
A vivifying Virtue, whence, depress'd
By false opinion and contentious thought,
Or aught of heavier or more deadly weight,
In trivial occupations, and the round
Of ordinary intercourse, our minds
Are nourished and invisibly repair'd,
The Prelude, Bk. XI, ll. 258-265.

しかしながらこうした経験は周知のごとく年を経るごとに減少してきたのであ

る。そしてその過去の経験さえも、上記の引用のすぐ後に述べられているように、徐々に忘れられ終には記憶から消えてしまうのではないかとワーズワスは恐れるのである。なぜなら少年期におけるような自然との交歓をものはやでなくなつたのみならず、それらの原体験の失うことは自然詩人としてのワーズワスの立脚点を揺るがせるものだからである。1802年から4年にかけて作られた「幼年時代を追想して不滅を知るオード」ではこのような、詩人にとってかけがえのない幻想的体験を失った悲しみが歌われていると同時に、それに対する解決を見出そうとする強い願望がうかがえる。そしてその中心的なイメージにおいてワーズワスは今までとは様変わりな自然と人生に対する見方をしている。

Our birth is but a sleep and a forgetting:

“Immortality Ode”, l. 59.

ここではワーズワスは人の誕生を魂の眠りととらえている。そしてこのことはこれまで見てきたような、肉体の「眠り」と魂の「めざめ」の関係と矛盾するものでない。しかしながらこの詩において注目すべきことは、魂が目覚めるのはかつてのように肉体の「眠り」を通じてではなく、内省によってであるという点である。ここではもはや自然との合一は主要な問題とはなっていない。なぜなら元来肉体の「眠り」を通じてすなわちある意味で肉体の五感を介して初めて自然との合一は果たされたのに、ここで内省という内なる眼が見ているのは目の前の自然の風景ではなく、「不滅の海」(l. 165)という神話的風景に他ならないからである。ここでは肉体はもはや魂を閉じこめる衣にすぎないし、自然もここでは主人公ではなく人間を育てる「乳母」(l. 83)として描かれるのみである。しかしながら同時にワーズワスはもはや消えてしまった「牧場も森も流れも大地も、眼にみえるもの全てが天上の光に包まれていた」(ll. 1-4)時代を忘れさることも容易にできないのである。それゆえにこの詩には、一方ではかつての大自然との合一の経験を自身の中心的支柱から外すことに対するためらいと苦悩が、そして他方では神話的世界をその精神的支えとすることによってこれからの詩人としての生きる道を見出そうとする希望とが交互に表現されるのである。そしてこの二つの心情こそその作品をこれほど高揚させてい

る原因なのだ。ワーズワスはこの二つの心情の妥協点を次のような言葉で述べている。

And O, ye Fountains, Meadows, Hills, and Groves,
Forebode not any severing of our loves!
Yet in my heart of hearts I feel your might;
I only have relinquished one delight
To live beneath your more habitual sway.
“Immortality Ode”, ll. 189-193.

結局ワーズワスはかつての自然との合一の喜びを捨てざるをえなかったことを認めている。新しい喜びはもはや以前のような肉体の「眠り」を通じた感覚的なものではなくもっと精神的なものであることは、次の詩行で ‘in thought’ といっていることでも分かるであろう。

We in thought will join your[Birds', Lambs'] throng.
“Immortality Ode”, l. 173.

そして先の引用で言っている、「自然の常なる支配の下に生きる」とは、かつてのような汎神論的自然を念頭におく生き方ではない。この引用はそこでワーズワスが述べている神話的時間観を、すなわち前生から来生へと続く時間的眺望を証言してくれるものとしての自然の役割を歌っているのである。言い換えればここでの自然は過去から未来へと続く時間的連続性を象徴するものとして、ワーズワスの神話の中に組み込まれた自然なのである。それゆえにこの詩においてはワーズワスは「ティンタン寺」で歌ったような自然との交流を望むことはない。むしろ深い内省を通じて我々に課された魂の眠りから覚め、永遠という不滅の相のもとで自然を眺めることが出来るというのである。

以上検討してきたようにワーズワスの自然観は少年期を中心とする「人のいのちをよみがえらせてくれる力をそなえた時点」を経験したことに始まり、そのことに対する思想的意義づけを与えそれを歌った「ティンタン寺」を経てさらに「オード」における神話的自然観の構築へと変化してゆくのである。それは視点を変えて言えば肉体の「眠り」を通じた自然との合一の体験とその回想

から、それを超越した自然観への変遷でもあった。「時点」という至福の瞬間の喪失を余儀なくされた時、ワーズワスの生来の不滅へのあこがれはこのような神話の創造によってのみ充たされえたのである。⁽¹⁰⁾ それゆえに「オード」における自然は内省という精神的な作用を受けて初めて意味のあるものになっている。これを象徴的に表わしているのが「オード」の最後の詩行であろう。

To me the meanest flower that blows can give
Thoughts that do often lie too deep for tears.
“Immortality Ode”, ll. 204-205.

ここでは「花」は思想を促してくれるから意味があるといっているように思われるし、‘mean’ という語で「花」を修飾することによって、「花」に対して覚える感覚的な喜びよりも内省を大事とする姿勢がここには知らず知らず忍び込んでいるように思えるのである。こうしてワーズワスの作品にあらわれる自然はこの「オード」がかかれたあたりより徐々に汎神論的神秘さを失っていったのである。それとともにちょうどこの「オード」と同時期に書かれた「眠りに」という作品にみられるように、かつての創造的な肉体の「眠り」はワーズワスの中において「昼と昼との間に横たわる幸いなる境」(1. 13) と呼ばれるような日常的な眠りへとその役割を変えていったといえるだろう。

〈注〉

- (1) Mary Moorman, *William Wordsworth, A Biography, The Early Years 1770—1803* (London: Oxford University Press, 1968), p. 426.
- (2) *The Prelude*, Bk. XI, ll. 276-277.
- (3) “I Wandered Lonely As a Cloud” で風景にじっと見込んだ時に、ワーズワスは同様の経験をしている。
- (4) “Expostulation and Reply”, ll. 21-24.
- (5) cf. Basil Willy, *The Eighteenth Century Background* (Middlesex: Penguin Books, 1962), pp. 272-273.
- (6) “earth” の意義については次を参照。
Ellen Douglass Leyburn, “Recurrent Words in *The Prelude*” in *Wordsworth: The Prelude* ed. A. E. Dyson (London: Macmillan, 1985), p. 120.

- (7) *A Concordance To the Poems of Wordsworth* ed. Lane Cooper (London: Smith Elder & Co.), “diurnal”.
- (8) cf. Moorman, *op. cit.*, pp. 423-426.
- (9) Geoffrey Durrant, *William Wordsworth* (Cambridge: Cambridge University Press, 1969), pp. 64-65.
- (10) cf. *The Prelude*, VII, ll. 398-411.
- (11) cf. Helen Regueiro, *The Limits of Imagination* (London: Cornell University Press Ltd., 1976), p. 69.